

## 週日の説教

金 大烈 神父 2011年5月4日(水)

《永遠の命を意識して、仮面を外す勇気を！》

主の平和

ある人がいました。その人は普通の人と違って、いつも特別なことをしたい気持ちを持っている人でした。ある日、川船の渡し場の前に立った時、何とかしてこの川の水面を歩いて渡ってみたいという気持ちが急に強くなって、その時から修練に入りました。どうすれば水の上を歩けるか。そして、そのような練習を始めてからから 20 年が経って、やっと水の上を歩くことが出来ました。向こう岸で彼をよく知っているお年寄りが彼を迎えました。彼は誇らしげに「結局私は成功しました。」と喜びに満ちた顔で話しかけました。すると、その老人はこのように答えます。「あなたが今それを成し遂げたから聞くけど、あなたが向こう岸からここまで渡る船賃はいくらか分かっているの？」と。「多分 250 円ぐらいでしょうか。」「ではあなたは、20 年間かけてその 250 円儲けたことになるよ」。(笑)

20 年間自己発展のために努力して、その段階まで行ったこと自体は、ある意味で価値があると思えます。そして、それをこの世の中も認めています。あの人すごい達人だ。しかし、それがその人の永遠の命と何の関係があるのか。川を歩いて渡って、それがそんなに意味があるいいことかとその老人は訴えたわけです。「ただ、200 円、300 円のこの船賃を儲けるために、水の上を歩こうと練習して来たのか。」「いいえ、そうではありません」という話をこの人は沢山持っていると思います。

さあ、私達はどうか。色々なことを行います。親が自分のことを全部奪われながら、子供を出世させるために勉強させ、全てを掛ける。それでもその子供が、本当に自分の人生を楽しめて意味を感じられるのであれば、親がその導きのために命をかけてもそれは美しいことだと思います。しかし周りをよく見回して下さい。そうではないように思えます。今の時代の親達は、本当に子供のために正しいもの上げてほしいです。

私達はどうか。色々なことをして何かを手に握ろうとしているのではないですか。それが今日の福音(ヨハネ 3・16-21)のように永遠の命と何の関係があるのでしょうか。それがためにもっと永遠の命が、真の光が遠くなることはありませんか。

ある意味で、私達は賢いと言いながらも、逆に永遠の命から遠ざかる道をわざわざ選んでいく姿が、この世の中で結構見えるのではないのでしょうか。テレビの番組をご覧になって下さい。優しい分かりやすい言葉で言えば、馬鹿なことばかりです。そしてそれを見ている人々は心を奪われて「私もあのような立派な家に住みたい、あのような船に乗りたい、あの人ネックレスが 1 億円だって、いつどうすれば私もあのようなネックレスを手に入れられるか。私は親のせいで自分の思うようには出来ないだろう。」とまあこんなふうに。そのようなネックレスを首にかけたら何かが変わるのですか。見せようとしてもそれで何が出来ますか。何の意味もないでしょう。カトリック信者である私達はならば、

このようなことをいつも意識的に考えなければならないと思います。

さあ、皆様は「オペラの幽霊」という小説。あるいはミュージカルをご存知ですよね。結構いい話ですので皆様にご紹介します。日本では「オペラ座の怪人」と言われているようですが、原文では「オペラのお化け」です。実際には小説がミュージカルになって全世界に放映されています。どんな話かご存知だと思いますが、思い出して頂くために内容をちょっと説明させていただきます。

あるお母さんに子供が産まれました。母親の立場で見ても醜い顔の赤ちゃんが生まれたのです。一分でも顔を合わせたくないぐらいに本当に醜い顔だったのです。その赤ちゃんの名前はエリック。ですからこの子をどうすればいいか、とお母さんが色々悩みましたが、結局お母さんは子供が少し大きくなった時に、屋根裏部屋に入れてしまったのです。出来るだけ社会と接しないように隠します。このエリックという子供は、全ての人、自分の母親からも見捨てられてしまったのです。

彼は憎みに満ちて、どうすれば復讐が出来るかという心でいっぱいになります。自己嫌悪、色々な人々に対する嫌悪感。それによって彼は結局幽霊になってしまいます。私はこの顔を持って、この世の中に生きることは出来ないとしてお化けになってしまいます。しかしこのお化けは、地獄か天国に行ってしまうのではなくて、この世の中を彷徨う魂さまよになってしまいます。

エリックの魂には一つのタレントがありました。その賜物は音楽的な才能でした。ある日彼は劇場に行きある歌手に出会います。その歌手が上手く歌えるように、才能があるように、自分のタレントを魔法によって送ります。その女性の歌手はクリスティーヌという人ですが、有名な歌手になります。エリックはこのクリスティーヌに自分の賜物を全部上げて彼女が有名になったので、自分のことのように誇らしい気持ちで満足して来たのです。そして自分でも知らないうちに彼女を愛してしまっただけです。しかしクリスティーヌにはすでに恋人がいました。彼女の愛する人は別にいる。それで今日の第一朗読(使徒言行録 6・17-26)のように何か妬みに燃えて、その恋人を捕らえて縛ってしまいます。そして、彼女に言います。あなたが私の靈魂だけ見ながら私と付き合うか、そうではなかったら私はあなたの恋人を殺すと。クリスティーヌは、仮面をかぶっている幽霊の生き方全てを、今までのことをよく聞きました。その話を聞いて悲しくて、クリスティーヌは慈しんで憐れんで、その幽霊エリックの魂に憐憫の情を感じます。そして涙を出しながら彼に「キス」をしました。その数秒間の出来事でこのエリックの魂は変わりました。今までもらったことのない、経験でした。エリックは自分のかぶっている仮面を外して、醜い顔を見せながら後方に去ってしまうという幽霊の物語です。

さあ今日、光と闇という言葉が出て来ました。私達も人前には隠したいものがあるって仮面をかぶっているのでしょうか。誰にも見せたくないもののために色々な仮面をかぶっているのでしょうか。

ラテン語でペルソナ(Persona)という言葉があります。ペルソナは教会用語として三位一体、御父、御子、聖霊と三つのペルソナと言います。それが哲学的な用語に変わって人格。人が持っている本物をペルソナと言います。しかし今は仮面、マスクという意味になっています。人格を持っている全ての人間は、仮面をかぶっているという意味が隠れているという話です。

さあ、今日の福音を読んで、やはり私達は少しでもこの闇から解放されて光の内に生きるためには、自分のことをちゃんと見る方法しかないという気持ちになりました。私も仮面をかぶっています。皆様に見せたくないところを沢山もっています。見せてこなかったでしょう。(笑)皆様も同じだと思います。

皆さま、本当に私が救われる方法は何であるかが基準になって、相手に見せるかどうかの問題ではなく、もし、いらぬ邪魔になるその仮面だったら、勇気を持って無くす必要があるのではないのでしょうか。結局そういう努力が、信仰の道ではないかと思ってみました。

ありがとうございます。